

安女齋隨筆

拾六函

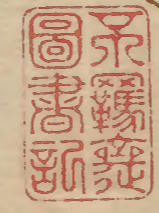
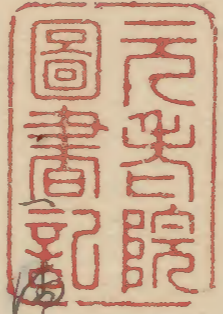
				和書門
		八	九	
	一	八	四	
一	三	九	八	類
六	架	函	號	
册				

庫	文	閣	内	
五	八			和
三	九			
函	四			書
九	八			
架	册	號	類	

内閣文庫	
番號	和 8948
冊數	16 (16)
函號	153 294



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



かくあるは 保成の保成の巻をくあつて
 おつせりきく 保成の保成の巻をくあつて
 時その使りの方よりいふは 保成の保成の巻をくあつて
 きー 保成の保成の巻をくあつて

保成の保成の巻をくあつて
 保成の保成の巻をくあつて
 保成の保成の巻をくあつて
 保成の保成の巻をくあつて

一 靴トカヲト云 又 い字ハ後古ノ字書トナシ 以方ヤク修

保成の保成の巻をくあつて
 保成の保成の巻をくあつて
 保成の保成の巻をくあつて
 保成の保成の巻をくあつて

此草を以て 仍舊友柄の字に本編を委して草編に
カキテハ用ガル番十レハ〇トモト云漢字ハ十キ十リ
ニテハ用ガル番十レハ〇トモト云漢字ハ十キ十リ
此方ニノミ有テ漢土ニ十キ物ニ少シ其義ノ似タレ
ハトテ強テ漢字ヲ當テ用ヘカラス唯此方ノ造リ字
ヲ用ルガ安ラカニテヨシ韌ニカキラス外ノ物モ准
シ知ヘシ

一 公方様康富記ニ永享十年八月十五日今曉 公方様
御下白八幡云々 飛鳥井権中納言雅世卿ノ富志記
行ニ永享第四年長月十日 公方様富士御覽ノ夕メ
ニ東國へ御下白アリ云々 永享ノ將軍ハ^{普光院}義教公也按

兼好法師ウツシク云々 二月十五日ありき夜中略云
後あは御所さぬのゆき女房云々 様をいふは伊勢編
の意よりいふべきこと云々 さらさらいふは云々
いとぬいふは云々 さらさらいふは云々

一 御園 南朝紀傳ニ正長元年正月昌山湯家石清水ニ
詣テ御園ヲ取テ將軍ノ家督ヲ定メシト見タリ康富
記云永享十年八月十五日中略 中山相公被叅石清水
被取御園云々 其比既ニ神前御園アリ上古ノ昏ニハ
見ヘス
一 程豆ノ字北方ノ古昏ニ祇ヲ程ニ作リ氏ヲ豆ニ作ル
宣命ノ文被詞等ヲ見ニ多ク見タリ然ノ草昏ニ祇ノ
草書祖如此也此草昏ヲ真昏ノ鉢ニ昏ナシタル也

誤ナリ

一 檮棟トウテウ嘉樹カジュ同檮トウ訛盛表記長門本平家物詔参考保元

物詔山城名跡志地名三本又万葉和名抄皆檮トウトフ

子ト訓ス具原篤信力大和本草ニハ棟ヲアフトトス

此何答曰棟也実ヲ金鈴子又若棟子ト云俗ニセニ夕

ニノミト云五月浅紫色ノ小キ花アリ和名抄ニ棟和

名阿布アブ智チハアリ棟トウ燄ノ平緒トテ浅紫色ト青色ト交

ル終ナルハ彼花色ニ拠ル也装束諸抄ニアフトニ檮

ノ字ヲ用タルアリ誤也野々宮定基卿氏又檮トウアフト

子ニセラル誤也○又檮正字ハ檮也玉篇ニ軟於ニ坊

惡木也トアリ何ノ用ニモツカハレサル惡木也莊子

ニ所謂作本散木也椿檮相表裏又椿ハ葉香ハシ檮ハ

葉臭シ此方ニ十キ木也近世西木比渡来タマシ植ル
人アリ和名抄ニ檮ヲ沼天ニ木也ト訓セシハ誤也又
装束諸抄ニ檮ヲアフトニ用ヒ又ハシニ用タルアリ
誤リ也

一 召籠 又同公卿召籠西園寺公經公同中納言実氏卿

東鑑ニ見ユ兼久ノ比也禁秘抄ニ侍臣召籠ノト見タ

リ上古ノ夏如何答曰上古ノ昏ニ召籠ト云夏見ナル

カ末サマノ世々ナリカ、ルト出来シニヤ上代御勅

當受タル人ハ出仕ヲ止ラレ家ニ鞞ヲ掛ラル信公の

頃鷹ノ口沁リ背七の宮も同けさ外戚ノの記リ

如カトノササ者督長カトノササ角小鞞カトノササ爲カトノササ作法カトノササハカトノササ終カトノササ々カトノササ人

な〜と見〜た


一 禰家之藝目禰ノ諸尼公ヨリノ傳來ト云是偽作ナリ
予其書ヲ見ルニ奥書ニ右藝目極秘乃射法傳授ト傳
授トアリテ其次ニ又右藝目之傳自神代之正傳而禰
家嫡々相傳之極秘也禰以真トアリ夫藝目ノ法トテ
法ノ字ヲ付テ云ハ皆近代ノ變ニテ真言印相トドヲ
用タル諸流多シ真言トドト修法ニナソテヘテ藝目
之法ト云也浴油法陀岐厄天ノ法トト、云類也上代
ナルト也京都將軍ノ末ノ世ノ比ヨリ起シカ禰家ノ
藝目之法ハ夫ヨリモ猶近キ比造リシナルヘシ近世
又華開ケシニ依テ彼真言家ノマ子ヲスルトテ朝此
者モアルニ依テ禰家ノ法ニハ真言印相トトヲ少モ

用スシテ神代ノ法也トマシラヘタル也混沌弓ト云
弓ヲ用ユ又射手束帶シ劔笏ヲ帶シテ射ト云テ上古
禁中ニテ此法ヲ行ハレシ能ニ作りナシ祝詞ヲ言ム
トアリ祝詞モ延喜式ノ祝詞トドヲ本ニシテ似セテ
造リタリ是天人唯一ノ神道ノ藝目ノ法也トイヘリ
神道ニ天人唯一ト云ハ萩原兼徳山崎岳加トト近比
ヨリ去出シタル名目ニテ理学ノ神道ト云是ニテ神
代ヨリ相傳也ト云ハ偽ナルヲ知ヘシ此此偽ヲ作テ
人ヲ誑ス者ハ彼輩カ退治スルト云野狐ノバケソコ
ナイニ同シ又云鳴弦ハツルヲテ弓弦ヲナラス
トニテ上古ヨリアル也日本記侍中群要禁秘抄源
氏物語鳥外古昏ニ見タリ唯弦ヲ鳴マテニテ修法ハ

十シ平家物語ノ時代清盛家ニ妖怪ノ有シ時墓目番
ト号テ墓目射サセシ一源平盛衰記平家物語等ニ見
ユ狐狸ノ類ハ弦音并墓目鳴音ニ怖ル、ナリ又夜中
歎ト用心ノ夕メニ墓目射サセシ一義経記ニ見タリ
又産屋ノ墓目モ東鑑ニ見ハタリ此等ノ墓目モ墓目
ノ矢ヲ射ルハカリニテ修法ハナシ古代ノ小笠原家
ノ弓昏ニモ鳴弦アリ墓目アリ其ワサノ様ヲ記シタ
ルノミニテ修法ハナシ彼家ノ昏モ後代ニ昏タルハ
皆ト違タルトモアリ

一 獄門ノ樗ノ木古キ昏共ニ首ヲ斬テ獄門ノ樗ノ木ニ
懸ルト去テアリ此樗ノ字用ヒ誤也和名抄ニ棟阿布
智トアリ此訓古シ樗ハ昔此方ニナキ木ナレハ獄門

ニ植ヘキ一有ヘカラス獄門ニ植シアフ干ハ棟ノ字
也何故獄門ニ棟ヲ植シゾト云理ハ何ノ昏ニモ所見
ナケレハ詳ニシレズ凡無證ノ推量ノ説ハ無益ナレ
凡愚私ニ推量スルニ國言ニ血ニ穢ル、一ヲ血ニア
ヘル凡アヘ血凡去ニ付テ血ニアヘル意ニテ棟ノ名
ヲアフトト去ヲ以テ斬首ヲ掛ニ為ニ此木ヲ獄門ノ
前ニ植タルカ論語ニ栗樹ヲ植テ民ヲシテ戦栗ナラ
シメント也ト云シ例モアリ又明朝ノ田汝成乃熙朝
樂事ト云書ニ白柿キナリカヲ串ニ貫キ大ナル橋ニ刺
テ正月ノ祝物トシテ供ス白柿大橋ヲ百事大吉ト取
リナシ賀物トスルヨシ見タリ其物ノ名ヲ取テ他莫
ニ擬ヘ用ル莫他ノ國ニモ其例ナキニシモアラス〇

又云諸裝束抄ニアフテノ衣アフテ十綖十トニ櫛ノ字
用タルハ誤リ也棟ヲ用ヘシ櫛ハ椿ト一種ニテ椿葉
ハ香ハシク櫛葉ハ臭シ此差別アリ秘傳花鏡ニ是夕
リ花鏡ハ清朝椿櫛昔ハ此方ニ十シ近世渡来ル
椿ハツバキニ非ス  櫛ハ椿ノ一種トアルハ同
形ナルヘシ
一素袍ハ素襖ヲア西襟ニ昏来レリ何レモ詞ニハス
ヲウト称フ具腋ノ形袍ニモ似ス襖ニモ似ス然レモ
袍襖ト連子テ字昏ニモ見ヘテ上ニ着スル礼服ノ惣
名ナレハ西襟ニ昏モ巨シキ也我朝ニテハ文官ノウヘノ
ヘノキヌヲ袍ト云縫腋也又右ノウキ武官ノウヘノ
キヌヲ襖ト云腋也 左右ノウケテウキナリ

ノキヌトハ上着ト云ヌナリ素襖モ腋ナレハ襖ノ
字用ルモ近カラシク是ハ形ニ似テ云也形ニ拘ラス
ウヘノキヌヲ義ニ扱テ云ハ、袍ノ字用ルモ亦違ハ
ス素トハ織物ヲ用ス麻布ヲ用テ質素ナルヲ云ナリ
花菱ナラヌヌナリ又云素襖素袍古記ニ見エヌ京都
將軍以來ノ昏ニ見エタリ古代無位無官ノ庶人ノ服
ハ直垂也 水干ノ直垂アリ將軍義満公武家ノ制度ヲ
立ラレシ比布ノ直垂ニ大紋ヲ付テ大紋ノ直垂ト称
シ無文ノ布直垂其大紋ノ直垂ノ紋ノ付処ウシロ
腰ノ紐胸紐菊綴等ノ違ヘテ大紋ノ直垂ヨリ一等下
ノ服ト定テ素襖ト名付テ武士ノ階級ヲ分ラレシナ
ラシク

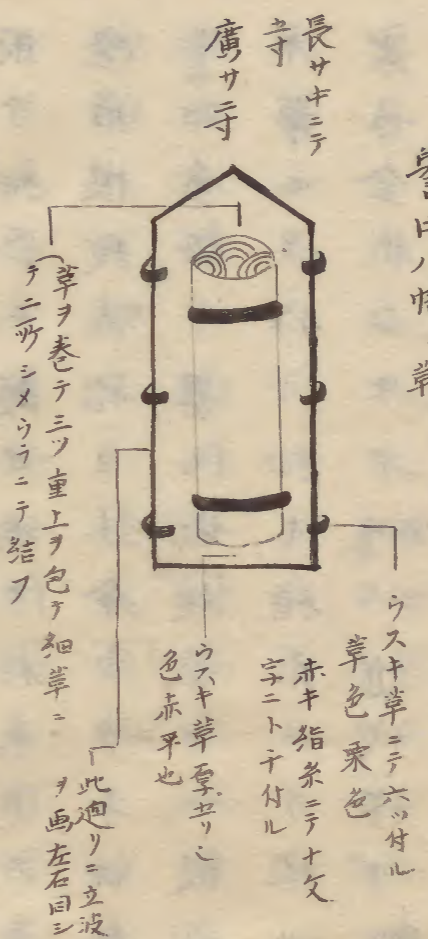
一 准后男女僧俗共ニ准后アリ准三后氏准三宮氏云位
ヲ后ニ准セラル、ニハ非ス三宮大皇太后宮○皇大
宮トニ賜ル所ノ年宦年爵ヲ三宮ニ准シテ給ハル、
云ナリ男僧ナトノ准后ハ人多ク知レトモ却テ女ノ
准后ハ知ラヌ人モアリ中古記寛治八年三月九日ノ
裏昏ニ准后五人雅子聰子令子内親王ト見タリ此五
人皆女也

一 譽田八幡ノ鞆河内國譽田八幡ノ神宝ニ神功皇后ノ
御鞆ト云物アリ稜威高鞆ト称ス其形ヲ摸シ作りタ
ルヲ見シニ吉部秘訓凶年中行夏等繪ニハ少シモ似
不古式トハ大ニタカヘリ万葉集坂河百首等ノ歌ニ
鞆ノ音ヲ詠セリ然ルニ彼神宝ハ弓弦ノ弾キタリ凡

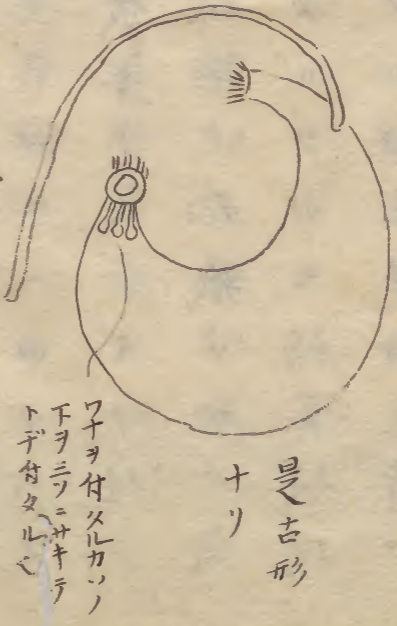
音ヲ奈スヘキ物ト見ヘス又彼神宝ノ鞆ニ龍ヲ画ケ
リ神功皇后ノ時我朝ニ文字ナシ文字書ナキニ葉
取テ細密ニ龍ヲ画キ彩色追スルナアルヘカラス又
皇后攝政ノ始ヨリ今マテ千四幾年ノ久シキヲ経タ
レバ金石ノ器モ剛損ヘキニ彼神宝ノ鞆紙ノ如ク薄
キ草ニテ作り細キ猪糸ニテ綴タルカ少モ朽齧破損
セス全クシテアルハ近代作りタル證也是神主等カ
神各ニテ稜威高鞆ト云名ヲハ知リタレ凡吉部秘訓
ヲモ年中行事繪ヲモ見ズ鞆ノ形ヲ知ラヌ且皇后ノ
世ニ文字モ繪モアリヤナシヤノ考モナリ妄ニ偽作
ニテ神庫ニ納メ置テ人ヲ欺キ誑ス也如此ノ名高キ
神社ニアル神宝ヲハ其神社ノ名ニ惑ハレテ愚人ハ

真偽ノ辨モ十クアキナク漫リニ尊信スル也傷キ
 一也故ニ此一例ヲ記ス也三輪明神ノ宝蔵ニアルト
 ナリホウ箆ト云フ物モ同類ノ偽作也故実ヲ知ラサ
 ル者ハ皆惑ハサル也

譽田八幡ノ鞆 偽作ナリ



吉部秘訓花年中行事繪之鞆



右譽田ノ鞆ノ外神仏寺宝物偽作
 モノ也故実ヲ知ラスシテハ真偽分ラ
 ナル也

伊勢ノ神室ノ鞆モ
 同形也

一天書 天書ト云神昏アリ新日本記ニ引用タリ今ハ
 亡テ傳ラス然ルニ正徳ノ比駿河国総社ノ神主総社
 宮内カ求出シタルトテ天昏ト号スル昏十卷ハカリ
 合冊ニシテ二冊アリ其天昏ハ釋日本紀ニ引用シ天
 昏ノ文一句モ見ヘス然レハ総社ノ天昏ハ偽昏ナリ
 勿用又近比総社ノ天昏ノ中へ新日本紀ニ引用タル
 天書ノ文ヲ處ニ配リ交ヘ入タル本ヲ何者カ拵タ
 ル由聞及タレ凡イマタ見ズ
 一流内流外被管被接等ノ官諸官ニ流内ノ官流外ノ官
 被管被接ノ官ノ差別アリ或ハ被接ナキ等ノ異アリ
 譬ハ今中務省ノ一官ヲ以テ云ハニ〇流内ト云ハ本
 官中ノ長官卿ヨリ以下主典録マテ各相當ノ位階ア

ニ求也ト注ス又マ子ク凡ヨム字彙ニ招也ト注アリ
物^マ求^マ招^キ求^ルハツノル也今俗ニ増長スル^マツ
ノルト云ハ〇ツヨルト云ノ語歟強ノ字也ノハヨト
通^ユルハトツヨル^マリ

一 殿下 関白ノ^マ他人ヨリ敬^ヒ称^シテ殿下ト云ノ殿

ノ音^スハ下^ル是後代ノ^マ也上古ハ皇太子^マノ御^マ世

ノ御^マ下ト云公式令ノ^マ字ノ條東宮皇太子殿

下トアルヲ以テ知ヘシ天子ヲ^マ下ト云ト曰^マ天子

ニ^マ下ト云上^ルハ^マ天子ヲ^マ下ト云ト曰^マ天子

称スルハ^マ醍醐天皇以来藤氏ノ^マ皇后ニ^マ備^リ外戚ノ

権威ニ^マ執^リ政ノ^マ権威ヲ^マ加ヘ一條院御宇ノ^マ比ニ至テハ

其勢甚盛ナリシカハ^マ諸臣諂^シテ藤氏^マ関白ヲ^マ殿下

ト称シテ後代ノ俗習ト成レルナルヘシ

一 五節ノ繪 五節ノ^マ画ニ薄青ノ^マ装束ニ端袖白キヲ着

タルアリ是ハ冠直衣トテ冠ニ^マ直衣ヲ^マ附タルナリ装

束拾要集云直衣ハ^マ禁色ヲ^マ聽タル着之春冬衣白キ志

ニ^マ雍有^マ裏又云^マ裏何モ平緒若年ノ人ハ紫成人ノ時次

弟ニ^マ薄クナシ或ハ^マ薄縹ニ^マモスル也云々彼繪ニ^マ直衣

ノ^マ表白キニ^マ薄縹ノ^マ裏付タルガ^マ裏ノ^マ縹色白キ衣ニ^マウ

ツリテ^マ薄青ニ^マ見^ユル也端袖ハ^マ白キ衣ヲ^マ半幅折返シ

テ直ニ^マ裏ニ^マ用^ルル故表裏^マツリ合テ端袖ハ^マ半ハ^マ白

ク^マ見^ユル也又^マ舞姬^マ顔ニ^マ扇ヲ^マカサシタルカ^マ扇スキ^マ徹

リテ^マ顔ノ^マ見^ユル^マ態アリ^マ見^ユ透^ル扇トテ^マ扇ノ^マ板ヲ^マ切^リ扱

キテ^マ紗ヲ^マ張^リタル也^マ透^ル扇ノ^マ裏^マ雅^シ亮^シ装束^マ紗^マ筋^マ抄^マ等ニ

見ユ以上又衣冠ノ人袍ヲ肩ヌキ裾ヲ左服帶ニ狹
ミ立舞フアタリニ色々彩色シタル小キ香包ノ如ク
ナル物多ク落散タル躰アリ是ハ舞姫ノ童御覽ノ時
ツゲノ棉ヲ色々ノ紙ニ包ミタルヲ舞姫カ持テ御
前ニサシ置テ御目苗ソタル童ノ棉ヲハ召シ留メラ
レテ其外ハ其マニテサシ置レタル躰也是紀ノ宗
直カ御厨子所預説也右ノ画ハ平家時代ノ古画也
一ソバ口ト云詞坐ノ字ソバ口トヨハ紫芝園漫筆卷
曰詩中用坐字無故之義也陸機詩體澤坐自指李善注
曰無故自指曰坐也張昭詩百籟坐自吟李善注曰無故
自吟曰坐也是坐字為無故之義也○貞丈云何ト云ワ
ケモナキヲソバ口ト云也

一魚魚或作燕同シ我ヨリ目上ノ人ニ淫スルヲ魚ト
云左傳三桓公十六年ニ衛宣公魚於夷姜注云夷姜宣
公之庶母也上淫曰魚ト庶母ハ我ヨリ目下ノ人ニ淫
スルヲ魚ト云左傳宣公三年ニ文公報鄭子之妃注云
漢律淫季父之妻曰報又字昏ニモ下淫曰報季父ハ父ノ
弟ナリ
一壺ノ百文ノ奥列ニ遊覽セシ人ノ云市川村ニ壺ノ石
文アリ土ノカタマリタル如クナル腕キ石ニテ後ノ
方処ノ新ニカケタル跡アリ文字ノ彫ヤウ甚淺シト
ソ此碑文折々ルヲ彖藏セリ曰テ茲ニ略之
一助語一字代二字○諸能之昔聞諸夫子之類○盍何代
○邑不可○身而已○雨如此皆代二字以一字也事物

紀原云似西國之二合蓋切音之原也見紫 ○我國ノ
助諾モ是ニ似タル莫アリ○サ然ナリノ代 ○キハ代リ○
ユヨリノ代○ソ共也ノ代 コ此ナリノ代是等切音ニテ
約言也又延言アリウヲ延ハシカ、キヲ延レハケリ
ノ類ナリ

一 委質 古人所謂委質者皆言相見之禮也宋儒以為委
棄體質略中 今按委置也質與贊同支義及相見者所執孟
子ニ出疆必載質是也右同昏見 ○人シテ出ストス
ルハ誤也質ノ字ノ音シトヨム體質ノトキハ音シツ
トヨム

一 俗ニ意風俗習俗ナト、云ヲ俗ハ時世ノナラハシ國
々ノナラハシラズト也雅俗ノ俗ハ正シカラズト云

ナリ雅ハ正シキヲ云也

一 恐字ノ訓疑ノ詞ニ恐ノ字ヲ用エルトヤリ○ヲソラ
クハトヨムハ誤也オソル、義ニアラス○ウタカフ
ラクハトヨムハシハルカフトクハト云ハ○ウタカ
ルト恐ニ字彙欺用ノ功音ク疑也慮也臆度也トアリ
臆度ハ推量シテ此ニテモアルヘキ歟ト疑フヲ云
ナリ

一 官朝ノ字官モ朝モ天子ヲ指テ云也然ルニ近世ノ儒
者ノ作文ニ將軍家ヲ指テ官ト云又朝ト云ハ誤リ也
今天下ノ政天子ヨリ不出シテ將軍家ヨリ出レトモ
京都ニ天子御座了レハ將軍家ヲ指テ官ト云ト朝ト
云ハ當ラズ称也天子ハ君也將軍ハ臣也君ノ称ヲハ

臣ニ用ヘカラス假ニ將軍ヲ天子ニ擬ヘテ文ニ昏ト
云フ詭モアレ氏実莫ニ非レハ一場ノ戯昏ト云ヘシ
後鑑トスヘカラス
一 勞^{ラウ}療^{サウ}治 因崎ノ人河野通親ト云者医方ヲ好テ虞天
民カ医学正傳ニ載ル所ノ神授丸ヲ用テ疾ヲ下ス其
長女ノ病時用之疾ハ下レ氏治速シ依テ死ス其次女
ノ病時早用テ疾下リテ全愈ルト紫芝園漫筆見ユ試
ムヘシ
一 記事雅俗ノ莫ヲ記スニ無學ノ人ノ書クニハ人ノ姓
名モ官モ國郡ノ地名モ其外ノ物モ當時世ニ用ル通
アリノマニ記ス故其昏幾百年ノ後ニ傳ル氏其莫
分明ニ知レテ後世ノ鏡ニナリ物事ノ證據ナルヘシ

今時ノ儒者ノ莫ヲ記スニハ人名官名地名其外ノ物
モ當時世ニ用ル通リニハ昏スシテ人名ハ氏ノ二字
ヲ一字ニ略シ名モ唐人ノ如クニシ官名モ唐ノ官名
ヲ似セ地方モ文字ヲ昏キ替ヘ其外ノ物モ唐ヲ似セ
テ昏ク故其昏ハ一年ノ莫ハサテヲキテ直ニ其席ニ
テ読テ見テモ當時用ヒサル莫大ニ違ヒタル事トモ
ナレハ一向ニワカラス何ノ用ニモ立サル戲昏ナリ
雅トハ正シキヲ云俗トハ正シカラサルヲ云彼ノ無
學ノ人ノ昏タルハ雅ト云ヘシ彼儒者ノ昏タルハ俗
ト云ヘシ唐ヲ似セテ正知レズ莫ヲ昏ヲ雅ナリト思
フハ心得違ナリ漢文ニテ文言ハ唐ヲ昏クヘシ人名
地名其外ノ物ノ名ハ當時世ノ用ル通リ以テ昏ヘシ

入ラサル唐人ノ真似ヲ好ムハ學文ノ至ラヌ故ナリ
主意ヲ知ラヌ又ハケ先生ノ好ムト也唐土ト吾朝ト
莫物同キアリ同シカラサル有リ似タルアリ似サル
アリ名ハ同シクシテ実ノ異ナルアリ名ハ異ニシテ
実ノ同シキアリ是等ヲ分別セヌ作文ニ漫ニ唐ノ如
クニ日本ノトヲ昏クハ相違ノトアル故日本ノ為ニ
ナラズ用ニ立サル文也唐ノ人ハ莫ヲ記スニ當時ノ
人名官名地名其外モ其マ、ニシテ文字ヲ昏カヘル
莫ハナシ

一 猫兒雞雛今春生レタル猫兒ヲ養フ八九月ニ至テ稍
生長セリ又雞雛ヲ養フ尾翼イマタ全備セズ猫兒時
ニ雞雛ヲ捕ラント欲スルノ氣色アリ每度或ハ吃シ

或ハ拳ヲアケテ打ツ後ニハ捕ラント欲スル氣色ナ
シ猫兒飯ヲ食スレハ雞雛傍ニ在テ其飯四ヲ舐ニシ
テ啄ニ猫兒穂ニシテ雞雛モ亦怖ルス文和ニテ食フ
是ヲ見テ思フニ人生レテ善心ナルアリ惡心ナルア
リ幼童ノ時ヨリ其父嚴シク教誡セハ惡心ニ生シ得
タリ凡カノ猫兒ノ如クナラサラニヤ常人ノ子ヲ養
育スルニ幼稚ニテ莫理ノ矣ハナキハ在ノ莫也ト云
テ子ヲ教ルトナキ故惡心長シテ成長ニ随テ惡心固
マリテ終ニ惡人トナリ身ヲ失ヒ家ヲ亡スニ至ルカ
ノ猫兒ヲ以テ鏡トスヘシ予大ニ感スル故ニ是ヲ記
シテ誡トス

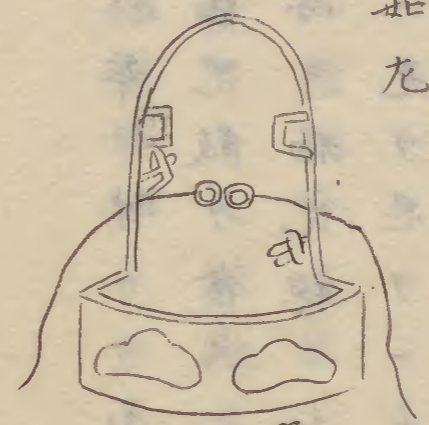
一 幾年目 俗語ニ十年目廿年目八月目十月目二日目

九日目十ト、去目ノ字ハ訓ヲ假リテメニ用ルナリ
 メハ〇メグリノ下略語也曰ノ字ノ意也雅語ニハ當
 十年當九日十ト、昏ヘシ目ノ字ハ用ヘカラス俗間
 通用ニハ目ヲ用ヘシ

一 眼象 ハシメテ 眼象 ハマナコ 一ノ是ケシシヤウト去器物ニ穴ヲ

明ルヲ眼象ト去也飾ノ為ニ穴ヲ彫ル也衝重 ツイカサ
三方四方ノ 眼象 如 此也助無智秘抄ニ平胡蒜ニク
考惣名也

正シヤウエリタルトアリ眼象彫タル也平胡蒜ノ
 団如丸



眼象 九緒



是車、俗、眼象



此形ヲ彫テ鑄ニスル
 ナイノ目ト云
 秋いろはの
 いの字ハタリ

又兼車ノ眼ニモ眼象アリ四左ノ如シ
 貞緒ハ草也別ニ後ニアリスヘテ此類ト彫ルヲ眼象ト云

俗ニ穴ヲ目ト云 イノ目 又針ノ漢ニテモ穴ヲ眼ト
 去天工開物佳兵ノ節孤矢ノ章ニ曰響箭ハ則以寸木
 空ニ中錐眼為竅夫過招風飛鳴ス昂十莊子所謂鳴也
 ト見タリ此方ニテ八目ノ鳴鑄鑿目 鑿ハ借訓也 四目
 十ドノ目モ穴ノ變ヲ云ナリ是等モ亦眼象也
 一 打梨 ツキナシ 明月記正治二年八月十六日天陰雨脚洒入夜
 暗雞鳴之程叅上御堂無程御輿出御輿出御予資家國
 行信光騎馬供奉 布衣 〇下略貞丈去此外古昏ニ打梨
 ト云一見タリウキナシトヨム是ウキナヤシノ略語
 ニテ裝束ノヤウヲカナルヲ去梨ノ字ハ訓ヲ借リテ
 昏也菓ノ梨子ニ拘リタル一ニハアラス鳥帽子ニハ
 打梨ヲサカサマニ昏テ梨打ト云ナヤシウキノ略語

ナリ精好妙生猶ナトニ漆ヌリテヤハラカニ作リタ
ルヲ梨打正ホシト云ナヤスト云ハヤハラカニスル
夏ヲ云ナリ

一 削氷 （削） 明月記元久九年七月廿八日自逢泰和歌所如

昨日家隆朝臣叅會 （雅經殊） 大理被取寄櫃ニ合 （初撰上）

下有破子（ツヨウ）凡土器酒等又有寒氷自取カ被削氷入學甚

下畧貞丈云暑月ニ去年氷室ニ納タル氷ヲ朝廷ニ貢

献スルヲ諸臣ニモ頒テ給フ具氷ヲ削テ食スル也御

ケツリヒト云ナ采花物諾ナトニモ氷ヲヒト云也

コホリ（切音ヒコ）コリ

一 書状書様筆法才葉集 （安永三年宰相入道） 云書状ノ消

息ヲ各撮ノナ （中） 筆ヲ墨タグトクマセテ置テ紙

ヲ卷ヘシ然テ筆ヲ取テ筆先ヲ見テ紙ヲ中ニ持テ各
ヘシナテ面ノ紙書ハ果テヌレハ面ノ紙ヲ取テソバ
ニ置テ又下紙ニ各ヘシ皆各終テ重子ヘシ是即子紙

ノ面ヲ以テ物各ニ為也取ノケテ各也重ル紙ハ面ハ

一方へ成ルカ故也此法ハ親王師近ノ御前ニテ御各

ナトスル時ノシツケ也是則紙ヲツカズニ各時ノ夏

也サテ各状ニハ追テ書ハセヌ事也礼紙ニハ追テ各

ヨスルナリ云ニ右紙一カサ子ニ各ク時ニ枚考

ニ紙ノ面表ニ各ナリ

一 宸ノ称天子ノ御所ヲ宸居ト云天子ノ思ヲ宸襟ト云

天子ノ自昏ヲ宸翰宸筆ト云類宸ハ帝居ノ宮殿ヲ云

也玉篇ニ宸時真切賈逵カ曰室之奥者ノ又字彙ニ曰

也玉篇ニ宸時真切賈逵カ曰室之奥者ノ又字彙ニ曰

後人指帝居曰宸增韻ニ帝居ニ北辰之宮故从山从辰
貞文云帝トハ天帝也天帝ハ
天文家又道家トト云

一異朝流内流外官橋嘉樹云流内流外ノ名ハ階唐ニ始
ル事物紀原云通典曰階制九品自大師始焉謂之流内
去ニ是ハ正一品ヨリ從九品下マテ凡三十階是ヲ流
内ト去ヒ又九流凡去也正一品ヨリ從九品下マテ凡三十階是ヲ流内ト去ヒ又九流凡去也
一位ヨリ少シ位九流ト云ハ一品從正ヨリ九品上下迄
二九級アル故也自大師始ムト云ハ我朝ノ相當如大
師ヲ正一品ノ位トシテ夫ヨリ以下府寺番吏マテ各
從九品下迄ニ當テ其位ヲ賜ルト云ハ大臣府寺番吏ノ
此ト判官主典ナト云フ因テ正一品ノ大師ヨリ從
九品下ノ番吏マテヲ流内ト云也○視流内ト云ハ未

又流内ノ官ニ昇ラヌモノニ先夫ノ官ヲ勤サセテ
流内ノ者ノ如クニ任ヒ試ルヲ流内ヲ視ルカ如ク十
ルニヨリテ視流内ト云視ハ和詔ニテ十ノラフト云
ムニテ明也○流外ト云ハ事物紀原云唐有流外勲品
自諸録及五省今史始焉トアリ勲品トハ我朝ニテ
勲位ト称スル乃此勲品ナリ是ハ勲功アル者故朝廷
ノ階アル人ト列立スベキ座次ヲ賜ル也譬ハ勲一等
ヲ賜フ人ハ正三位ト從三位ノ間へ引立スルカ如シ
諸ノ禄夏五省令吏ノ類ハ尚書門下中書唐ノ宦内
侍凡テ六省也此令吏ノ類ハ尚書門下中書唐ノ宦内
十レハ六令吏十リ九流ノ内へハ入ラス勤レ凡其勲
功アル者へハ夫々ニ坐列ヲ賜ル也是位階十キ者故
ニ九流ノ外十レハ流外ト云也此流外ニモ又視流外

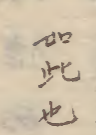
ト云アリ未々録更令史ニ至ラサル者ハ勤岳ノ坐次
ハ賜ラ子氏流外ノ座次ニ視ヘテ其次ニ列立スヘキ
者ヲ視流外ト云前ニ云如ク視ハ十ソラソト訓シテ
能ク聞エタリ今ノ世ニ何席ノ次何彼ノ格ト云ト曰
シ録更令史ハ九岳ノ内ヘ入ラズテ流外ト称スル
謹ハ五雜俎云唐玄宗登樓望渭水見一醉人臨水卧問
左右曰是何人ソト左右不知黃幡綽爰曰此ハ是年滿
令史ト上問何以知之對云更一博セハ入流上大ニ笑
トアリ考ヘ兵ヘシ〇右流外流外ノ目和漢綴ハ異ナ
レ氏其父ハ相等シ以上嘉樹記
一 赤染氏姓氏録ニ赤染氏無之日本紀天武紀上ニ赤染氏
造アリ

一 マツハシノ袍左ニ記ス所ノモトホシノ袍ノ更ナリ
和名抄ニ縫掖和万都波之乃字都乃岐叔トアリ〇モ
トホシノ轉語也ウヘノキヌハ袍也是ヲホウ正ナリ
袍ト云ホウ正キハ縫掖ノ字音也掖ノ字又掖ノ字ヲ
モ用ユ縫掖トハ袍左右ノ服ヲ常ノ小袖ノ如ク縫連
子テ腋ノ冢カサレヲ云是文官ノ人ノキル袍也
一 モトホシノ袍右ニ云所ノマツハシノ袍也モトホシ
トハ縁ト云ニナリ也縫掖ノ袍ノ裾ニ橫幅ヲ縫付ル是
ヲ襪ヲト云襪ハヘリヲ付タル如シ故ニモトホシノ
袍ト云也モトホシノ詞轉シテマツハシ氏云シマツ
ハシ如此音相通シハノ字ヲトヨムヘシ
一 ワキアケノ袍袍ノ左右ノ服ヲ縫ヒ連子ス狩衣ノ服

在位ノ天皇順徳院ノ御夏也後鳥羽院此時上皇ニテ
 天皇順徳院ニ御對面ノ時御直衣御冠ヲ召タルナリ
 是イフ冠直衣其以前外殿ニ出御ノ時御直衣ニ御鳥帽
 子ヲ着御直衣ハ鳥帽子アリシヲ御對面アルヘキニ依
 テ御冠ニ改ラレシ也順徳院ハ後鳥羽院ノ御子ナレ
 氏天皇ノ御位ヲ重ニシ貴ヒタマヘテ如此シタマヘ
 シ也惣テ上皇如此ナルヘシ
 一大中納言近代無正官近代ハ大中納言正官ハ無之皆
 権大納言権中納言ノニ也是何故ト云夏詳ナラス臺
 義知云考得ス公家ノ衆ニ其故ヲ知ラスサマシト云
 下レ氏皆推量ナレハ取ルニ足ラス正親町院天正五
 年十一月廿日大納言正二位藤原実枝卿同年同月中

一 納言正二位藤原基考卿近代右西人正官ノ大中納言
 也其後大中納言考ニ正官中絶スト滋野井臣相公鹿
 卿ノ御之由嘉樹ノ説也

一 朽木形 朽木秋ノ几帳古昏ニ見タリ其又様左因ノ
 如シ
 東方ニテ灌頂ノ時ニ當時用ル帳是也地
 白文濃キ蕨芳今云ト一ニ去地萬ニスハウ
 如此也
 ト云又春日縁紀筆者不知ニモ見タ



一 滋野井禁秘抄聞昏ノ内ニ如此アリト樞嘉樹ノ説
 也古ノ朽木形然ルヤ否ヤ口貞丈云禁秘抄清凉殿ノ
 崩帳リ下ノ御注ニ四面有儿帳帷夏生以胡粉畫花鳥
 冬朽木形印本ニ花鳥ヲ葦藎ニ作ハトアリ夏ハ花鳥
 冬ハ朽木形ト相對スレハ枯木ヲ去フカ如シ猶考ヘ

シアラヌ物モ當時ハ公家衆ノ説トイハハソレニ定
マルヲアリ朽木ト草木ノ枯ルハ生ノ絶ニ非ス
凡物ノ名ニ感テ実ニ違フヲモアル者也可熟考
一 慥字 又シカト訓ス玉篇ニ七到切言行相應息トア
リ言諾ト躬行ト相遠ナルハ口夕シカ也海篇正韻ニ
誠信也トアリ海篇朝宗ニ篤実ノ息トアリ考ニ口夕
シカノ又ナリ俗ニ口シカト云モ夕シカノ略詔也
又切ノ字密ノ字モ口夕シカト訓ス口慥々ト重テ用
也一字ハ不用也俗ニハ一字用ヒ来ル也是ハ雅ニ非
ス雅ニハ一字用ヒ不一字ニハ切字密ノ字具文ニ依
テ用ハシ五言十
一 塩硝五六年歴タル人家ノ下ノ土ニ生スル也是ヲ

試ルニハ床ノ下ニ這入テ床下ノ土ヲ取テ日ニ乾ニ
テ火ニ焼テ見ルニ塩硝生シタル所ノ土ハ火ニ逢ヘ
ハ必スハ子ル者也ハ子ハ塩硝アリト知テ横坑ヲ掘
テ塩硝ヲ取ル也上ヨリ九寸程下ヨリ塩硝アリ色白
ク明礬ノ如シ是莫ノ塩硝ニテ火菜ヲ製スルニ其力
勢強シ作塩硝ハ少シカ弱シ作り塩硝ハ深山ノ谷川
アル所ノ水邊ヲ掘テ塩ト砂トヲ埋メ置ハ七八年歴
テ塩硝トナル也境川親真説
一 鉄炮玉込込ル鉄炮玉五ツ六ツモ放セハ火菜筒ノ中
ニ焼付テ玉込込リテ玉入難シ火菜ノ丸塩硝ハヤウ
付ハルユヘソレニ麻カラノ灰トヲ故ニ放ツ玉ハ段
々ニ小キ玉ヲ入レテ放テハ一挺ノ筒ニテ玉幾ツモ

放サレハ也サレハ玉箱ニ玉ノ目方ヲワケテ昏付ヲ
 シテ別々ニ入レ置リ也。是大極秘傳ノ術也。右目人記
 一 低キ所ハ鉄炮打ッ術山上ヨリ山下ハ打テ城上ヨリ
 城下ヘ打ニハ筒先ヲ下ル故玉コロビ出ル也。此時ハ
 常ノ如ク火薬ヲ入玉コロビシテ其玉ノ上ニ又玉薬
 ヲ少入テカルクニテ突キ固ムレハ二度目ノ火薬力
 玉ノ丸ミノ透間ヘ入テ玉ヲ抱ヘ留ル故玉コロビ出
 ル。是又大極秘傳ノ術也。右目人記。負丈又或
 傳ニ常ノ如ク玉邊ヲシテ其玉ノ上ヘ紙ヲ丸メテカ
 ルコニテ突固メテ打テハ紙ニテ玉ヲ抱ヘ留ル故玉
 コロビ出ル。是又大極秘傳ノ術也。右目人記。負丈又或
 一 鉄炮ノ露切付兩覆筒ノ先ノ方ニ四角ニ高クシテ筋

ヲ堅ニ彫リ中ニ小キ穴ヲアケタル物アリ。是ヲ露切
 ト云カノ筋ハ見通シノ準道ノ為也。又雨露其上ニ溜
 レハ準道ヲ見ル障ニナル故コノ穴ヨリ露ヲ又カス
 為也。又夜ハ線香ニ火ヲ付テカノ穴ニサシテ準道ヲ
 見ル也。又火ブクノ釘管ハ兩降日ニ打ニハ火皿ノ上
 ニ覆ヲスルニ具兩ヲホヒヲカノ釘ノ管ノ穴ヘサス
 ナリ。兩覆ハ金ニテモ草ニテモ作ル。火繩ノ火皿ニ當
 ル時障ニテ又様ニ兩覆ヲリハシテ火繩ヲ火皿ニ
 アタルヤウニ作りヤウアリ。右目人記。

一 鉄炮貫堅物 鉛玉ニテ不貫ハ銅玉ヲ用 銅玉ニテ不
 貫ハ鉄玉ヲ用 右ニ同
 一 鉄炮火繩兩天ニハ竹火繩消易シ紐ニ深タル木綿火

リニ害アルヘシ然レハ大将ハ鉄炮無用ノ藝也太平
ノ時鳥歎ヲ打テ慰ニセシ為ニ好ム歎ソレモ鉄炮ヲ
用ヒズシテ弓ヲ用ヒ矢ツギ早ヲ修練セハ戦場ニテ
危ヲ防ク益アルヘシ鉄炮モ武藝ノ一ツナレハ大将
ノ自ラ勤ムヘキ藝ニハ非ス

一 装束 装束ノ二字ヨソホヒツカヌルト訓ヲ惣テ物
ヲ飾ル也俗ニ冠服ノ一ツヲ装束ト云ハ誤也冠服
ハ身ヲ装束ヌル也禁中ニテ公更行ル、日ニ御座ヲ
掛テ屏風ヲ立天子ノ御座諸臣ノ座ヲ設ケ庭上ニ旗
鉾等ヲ立列子標ヲ立ニ版木床子兀子胡床案等ヲ置
ク類ノ如キヲ装束ト云延喜式江家次第其外古託ニ
見タリ是御殿兵庭上ヲ装束スル也又太刀鞍具等ヲ

飾ヲモ装束ト云也

一 差遣 サシハシロ 差遣ノ名舊記ニ見ヘタリ近クハ後水尾院年

中行更正月七日ノ条ニ上巻曰野鳥丸柳原ハ外極を

きト常の侍而 是任常の侍而空の侍任是任 惟えん 是任常の侍而空の侍任是任

ノ未申の角此等一帖を撤して 是任常の侍而空の侍任是任

く 是任常の侍而空の侍任是任 秘化公差遣トイ事以テ禁中へ物園危の此れハ差遣

トイ事 是任常の侍而空の侍任是任 此れ之を 是任常の侍而空の侍任是任

書院 是任常の侍而空の侍任是任 之の 是任常の侍而空の侍任是任

之 是任常の侍而空の侍任是任 之 是任常の侍而空の侍任是任

之 是任常の侍而空の侍任是任 之 是任常の侍而空の侍任是任

之 是任常の侍而空の侍任是任 之 是任常の侍而空の侍任是任

之 是任常の侍而空の侍任是任 之 是任常の侍而空の侍任是任

御座と柳原より四例あり是筵の伊礼と柳原列の
規模より四例をも通うこと見たり身丈梅在代ハ茅
の巻と若筵とハ列して是を以て後代夢中の事
大辨有略せし事あり依る常の巻をうりて
若筵より用ひしを之製のお似る故なり

一 平敷御座 ヒラシキゴザ 舊記ニ見たり或ハ御ノ字略シタルモア
リ是ハ御座疊ラシク下也 敷並タル常ノ疊ノ上ニ主
ケニヘリ 平敷ト云ハ高御座ニ對シテ云ノ詞也唯御
座トイヘハ高御座ニ紛ル、故平敷ノ御座ト云ナリ
平座ト云受アリ平敷
御座トハ別也下ニ記ス

一 水引 水引ハ紙捲と糊水を用ひて水引を清き通具の
一を以て略して水引と云後水尾院年中事より是也

糸の巻を紙と包とて結び或ハ紙をくちあひく上を結
物やうの油水引を用ひて水引を清き通具の
内よりハ水引と云身丈云ハ紙を用ふる糊水引は
若しをせむより水引を清くすとのハ糊水を
いふ又色々の具ハ膠を以てまの左成へり後述
お捲きと云縁よりありてハ水引菓子巻と云りて是
事ありと云水引ハ一概成事なり

一 平座建武年中行夏首各云四月十日朔日於南殿宴諸
臣給祿謂之二孟旬 身丈門云 但無出御時於宣陽殿賜酒
饌給祿謂之平座宣内ノ時ハ以陣座被准宣陽殿行平
座

一 前物 公家ノ古記録ニ賀事ノ条居前物調前物ナト

アソ前物トハタトヘハ元服ノ質ナレハ元服シタル
人ノ前ニ居ル膳部ノ夏ヲ云也

一 銀器日記禄ニ膳部ノ具ニ銀器トアルハ食物ヲ盛ル
器ヲ銀ニテ作タル也本式ハ土器ヲ用ルヲ奢侈ニテ

銀器ヲ用ル也古風ハ奢侈ニ依テ変スルナリ
一 御料人 康富記文安四年十一月二日ノ条ニ滋野井

故中將実益子息御道祖幼童ニ限ラヌ称也源平盛衰記
ニ信濃ナル木曾ノ御料ニ汁カケテ唯一口ニ九郎判

官ト云哥アソ彼義仲ハ木曾ヲ領シタリ是木曾ノ御
領人也又村里ノ田畠等ヲ誰殿ノ御料ト云ヘハ御

料人ト云哥ヘシ右ノ哥ハ飯ノヲモ御料ト云ユヘ
タリ飯ヲ御料ト云ハ夫ニ云カケテ九郎ヲ食フニ云カケ
責人ノ食料ヲ云ナリ右ノ歌ノ御料ハ御料人ノ略ニ

テ義仲ヲ指シテ云也曾我物語ニ頼朝ノ富士ノ牧将
ノ行粧ヲ記シタルニ御料ノ其日ノ装束ハトアリ御

料ハ是モ御料人ノ略ニテ頼朝ヲ指シテ云也料領ノ
二字何シモ用ヘシ御料御料人ヲ下略シテ御料ト云

ト轉用傍通シテ唯ニ人ヲ敬フ詞トナリテ女子ヲモ
御料ト云夏ニ成レル也

一 塵地 千ソヤトヨム也今ハ梨地ト云金ノ粉ヲ散シ
タルカ塵ノ積リタルニ似タル也平塵地ト云ハ金ノ

粉ヲ厚リ滋リ散シテ透間ナキ也平ノ字ハ平等ノ意
也俗ニヒラ一面ト云ニ同シ薄塵地ト云ハ金ノ粉ハ

甚少ク薄ク散シテフクト透間多ク見ユルヲ云フ
是ハ凶畢ノ時ノ太刀ノ鞘ナドニ用ル

一 汰懸地 是ハ漆ニ金泥ヲ交テ一面ニ塗タル也 汰懸
 ハソ、キカケルトヨムテ金ヲトラカシテ汰キカケ
 タルカ如シ今俗ニスリ梨地ト云也
 一 蒔繪 蒔クト云ハ古ノ詞ニテハ物ヲ飾ルト云マク
 ト云繪カキ飾ル故蒔繪ト云也蒔ノ字ハ借リ字ナリ
 物ノ種ヲ蒔ク義ハ是ニアハス火威ノ鎧ヲシキメニ
 蒔タルニ義經記ナドノ云モ飾ルト也カマクト云ハマ
 シルハ
 一 邂逅 此二字玉篇ニ不期而會也トアリ待モウケル
 シテ思ヒカケナリ人ニ會タルヲ云也俗ニタマサカ
 トヨミラタマノ交ニ用ルハ非也タマクト云ニハ適
 然又偶然ノ字ヲ用ヘシ又マレナル交ニ用ルモ非也

マレナルニハ希又稀ノ字ヲ用ハシ
 一 辨神時帶 弁否橋嘉樹云云ル安永九年四月十六日藤
 原公聽卿中將 弟小路宰相ニ荒山日光ノへ幣使ノ時帶
 ヲ解スシテ神前へ進ニタマフヲ見テ社司等去フ御
 解解 解解アルヘキ歎ト相公不肯社司等重テ去先例諸卿
 解解 解解シタマフテ恒例也ト于時相公問タマハク當
 社ハ男神歎又女神歎ノ相殿ニ在ス歎ト社司答テ去
 東照宮一座ニテ相殿ナシト相公云サラハ解解 解解ニ及
 ハサレ莫也ト
 宣命奉幣每事或倭嚴ナリキ社司等子細ヲ知ラズ點
 シテ退リ相公莫終テ還出アリト云此莫後日ニ堂上
 ノ御方へ尋問奉リシニ勅物ヲ賜フ如ク

西宮記云諸社ノ使帶叙詣賀茂社可解云々後二糸記
應徳三十六三賀茂詣下賀茂解叙上社不解叙云々台
記仁平八十春日詣奉詣若言白妙幣而段再拜依非神不
叙云々此云事可被散不番ト藤原伊光卿御染筆也深右
業嘉樹家藏也嘉樹別ニ考アリ廣橋殿
考ヲ非ナリト云當レリ別冊ニアリ
一 湊花黒ノ字海人藻茂ニカ子ヲ付ルト云ヲ金ヲ付ル
トアリ一本ニハ湊黒トアリ按湊當作湊也黒ハ黒水
ノ二字ヲ合セタル造リ字也カ子トモハグロメ凡ヨ
ムヘシ若シ他各ニモ此字アリテヨメス時ノ為ニ抄
出シ置也湊玉篇ニ都貢切江南呼乳為湊又黒玉篇ニ
呼得切水ノ名トアリ右二字凡ニ漢土ニモアル字ナ
レ凡ハグロメノ一ニハアラス此邦ノ造リ字ガ偶然

ニ漢土ト同シク出来シ也此類間有之鯉ノ字モ此類
也堅魚ヲ合テ鯉ノ字ヲ造リテカツトヨム漢字ニ
鯉アリ唐韻ニ大鯛也トアリカツホニ非ス別ノ魚也
是モ此邦ノ造リ字ガ偶然ニ漢字ト同シク出来シ也
一ニシテ論スル莫カレ
一 給侍候中古以来諸家記禄ニ給フマ侍ハル候ヲフノ
三字ヲ用フ是敬ヒ貴フノ詞ニテ吾國ヲヤ
一 浪人穿人 浪人ハ身ヲ寄スル方ナリ流浪スル人ナ
リ浪容トモ云然ルニ俗昏ニ浪人ノ変ヲ穿人ト昏リ
ハ誤也穿ハ獄屋也獄屋ニ入ル人ヲ穿人ト云ヘシ
一 清水觀音歌 清水お清とやんソ小草紙にも見也新巻
とらふも入るも多しと云々
とらふも入るも多しと云々
とらふも入るも多しと云々

しらざるは世の中へいつん降りれば秋大慈大悲の心
ありきとてそふ人多くはも奇の心くさへうさへ
さあぢり原のさへもくさとしひたさへもくさの縁をさへ
てもゆかとりかへとり火の縁をさへ絶をさへへんれ我
世の中へいつん降りてはもくさの縁をさへへんれ奇
あり何のおりよとの白りさへもくさと云ふもや
秋高のさへもくさの縁をさへへんれ奇の心くさへうさへ
さあぢり原のさへもくさとしひたさへもくさの縁をさへ
の口字をさへへんれ縁をさへへんれ一切衆生の
原のさへもくさとしひたさへもくさの縁をさへへんれ
さあぢり原のさへもくさとしひたさへもくさの縁をさへ
後人の身へうさへもくさ

一天命 天ハ無心ナル物ナレハ人間ニ吉凶福福ヲ施
スヘキノ意ナシ吉凶福福ハ自然ニ到来スル也其自
然ヲ指テ名付テ天命ト云是儒家ノ天命也天ニ天帝
ト云者アノテ吉凶福福ヲ目トスト云ハ邪説也天帝
ノ説ケハ仙家ノ梵天帝釈ノ説ニ似タリ
一 五節俗ニ五節句ト各ハ誤也又五節句ト云ハ其賀
日ノ意也ト思フモ誤也五ケ日ノ賀日ヲハ賀節ト云
也其日時節ノ食物ヲ設ケ供ヘテ賀奠ヲ行フ其食物
ヲ節供ト云也俗ニ略シテ節ト云ト云是也
一 昏礼用凶礼今世俗ノ説ニ昏礼ニハ凶奠マナヒラズ
ルト也死人ハニタヒ帰ラヌ者也女ハ婚入シテニタ
ヒ親ノ家へ帰ルマシキ奠ナレ故凶奠ノマ子ヲスル

○橋嘉樹云滋井公廉卿御勅物云小狩衣之夏或抄云
半尾のりくかきぬのりくろく一尺をりくこく

とのく実時卿ノ記ニ徳治二九十一新院御小狩衣同
記永仁三八十九園白殿令着小狩衣大口十二月五日
前大弼言公衡小狩衣奴袴云々

一サウト云俗語アリサウ也十ササウ也ヤハラカサウ
也十ト云此サウト云ハサマト云ヲ轉シ延ヘテ云
ナリアリサウ也トハ〇アリサマ也アルヘキ様子也
カタサウ也ハ〇カタサマ也カタキ様子也
雅語ニ助トナル故
所ニ記スナリ
俗語ニ通
達スレハ

一音博士統日本記曰光仁天皇室龜十九年十二月康寅
玄蕃頭從五位上袁晋卿賜姓清村宿称晋卿唐人也天

平七年随我朝使帰朝時年十八九學得文選尔雅音為
大學音博士於後大學頭安房守〇真丈吾朝唐音傳テ
此音變セスシテ今ニ習傳タリ漢上ニテハ宋朝以來
外國ノ胡人多入支リ右ノ變シタル上ニ今ノ清朝モ
鞞韞ノ音支テ古ノ唐音ハ變シタリ此竟猶別冊ニ記
ス又統日本紀曰前右大臣正二位勳二等吉備ノ朝臣
真備者右衛士少尉下道朝臣國勝之子也靈龜二年二
月十二日從使入唐留學受業研覽經史談涉衆藝我朝
ノ學生播名唐國者唯大臣朝衡二人而已云々
朝衡ハ安倍仲磨也
大臣ハ吉備也
學ニ唐音ヲ傳ヘ来レル也今世唐音ト云ハ清朝ノ音
ニテ右ノ唐音ニハ非ス

一朝餉 或同朝餉アサカレヒトヨミテ 天子ノ御飯
也收膳司調進之其朝餉ヲ食御シタモウ所ヲ朝餉ノ
間ト去トゾ朝餉トハ早朝ノ御飯ノミニテ夕ノ御飯
夜ノ御飯ハ歎セサル故ニ朝ト去カ如何答去禁秘抄
ニ去朝餉御膳朝夕ト見夕リ朝夕夜三度供シ奉ル也
朝ノ字朝夕ノ朝トレ氏又ミカドヲ指シテアサ氏去
アソアサマツリユト、去ハ朝政也不アソント去
ハアサヲミノ畧語ニテ朝臣也此ニツカアサハミカ
ドウアサト去也サレハ朝餉ノアサモミカドノ麦也
朝夕ノアサヲ去ニ非ス朝廷ノ朝也餉ノ字カレイト
ヨム故乾シカウハシタル于飯ノ麦也ト思ヒ諺ル説
アリ非也玉帝ニ餉式亮切饋也トアリ和名抄ニ四声

字苑去餉ハ以食遺人也注ニ訓加カレ於ク留俗ニ其
加礼比トアリカレイトクルト去ハカレハ彼又カシコ
也此處ヨリ彼處へ食ヨイトヲ饋也カレヒヨクルヲ
略シテ俗ニカレヒト去也朝餉ハ内膳司ト去官舎屋
十節ノ一ニテ調味シテ御殿へ饋リ歎ルユへ餉ト去也
一白紙除秘抄去清昏ノ一萬紙白紙十紙外ト去ハ紙屋紙
○仁安二八一權中紙言家家卿之又被行小除目參議
雅賴朝臣執業依無宿紙以白紙昏召名去、滋井公遣
卿去古白紙ト去ハ紙屋紙之由サモアルへキ軟叔紙
屋紙ハ宿紙ノ麦歎然レハ一物二名歎而ルニ依無宿
紙以白紙昏之條相遠如何爰平松前萬門去白紙ト去
ハ宿紙ノ麦也仍ビヤクシトヨムノ由薩戒記所見去

以是思之マヘノ白紙ハビヤクシ後ノ白紙ハ尺シ
口キ紙款猶可尋〇真丈按除秘抄ノ文ヲ明ニ矣サ
ニ依テ白紙ヲ紙屋紙一名ノ一名ノ如ク思也除秘抄
ニハ黄紙ニ對シ紙屋紙ノ下ヲ白紙ト云テ假リニ分
別ヲ立タル詞也然ユヘ注ヲ加ヘテ白紙ト云ハ紙屋
紙ノ下也トコトハリタル也黄帛ニ對セスシテ常ニ
紙屋帛ノ一名ヲ白紙ト云ソト思フハ誤也是ニラ右
ノ本文明カ也疑フ下勿レ是ノミナラス書籍ハ義理
ヲ取誤レハアラス更ニナル也活見アラサレハ文義
凌滯スル也

一 返抄今世俗ニ去受取謹文也返抄後日ノ謹據ニ成物
ナル故將用傍通シテ受取ニ非レ氏後ノ謹文ニ成ル

一 凌標ヒヤウ古記ニアル詞也人ヲ打擲スル下也此ニ
過テ考ヘシ凌ハ字彙ニ犯也標ハ字彙ニ刀炳ノ切撃

也トアリ凌ヲ陵凌等ニ作ハ非也又別ニ陵轢ト連タ
ル字アリト是ヨムハ是ニ字共ニキシルトヨム
車ノ輪ノキシル也

一 標手半 仏像ノ長ケヲ人ノ手ノ寸法ニテ一尺ニ
寸五分ニスル下也大ニヒ人サシユビヲ昏言文字考
ニ一標手半〇標ニ標並ニ同シ廣雅ニ一尺ニ寸也出

僧祇律ト見タリ一尺ニ寸ト云ハ手ノ寸トテ一尺ニ
寸五分ヲ約テ云キルヘシ標ノ字捺ト同トアリ字彙
ニ標与掲同シトアリ掲ハカ、クルトヨム音ケツ十

レ此標ト同音ニ用ル歟乎ヲ以テ寸尺ヲ掲ル故一標

年半ト云アルヘシ佛像ノ外ニハ此名目ナシ

糸毛イトケ糸織ノ鎧ヲ糸毛ノ鎧ト云威毛ト云糸ノ纏ヲ

カケタル車ヲ糸毛ノ車ト云皆糸ヲ毛ニクトヘテ云

由ノ説アリソレニテモ聞ヘタレ氏猶足ラサルカ如

シ按ニ糸毛ノ糸ハ毛ニ非ス糸キセノ約メ語也糸ヲ

着セタルヲ云シキセノ切音ケトナルニテヤカルトハ

覆ヒ被ラシムル也夜ヲキセル意也

一散字散人散位散事等ノ散字ハ莊子ノ昏ノ人間世ノ

篇ヨリ出タリ其趣キハ石近ハ大ユ也石ハ存ノ國

ニ行キテ曲轅ト云山ニ至ル其處ニ標社ト云神アリ

其社地ニ大木アリ大サ百人而手ヲ圍テ固ム程ニテ高

廿八十俣俣ハ尺ノニテ後ニ枝アリ彫テ舟ニ作ルヘキ

程ノ木也是觀之人多シテ市ノ如シ然ルニ匠伯大ユ

ヲ具木ヲ顧スシテ行キ過キタリ弟子厭コテカノ大

木ヲ見テ走テ匠石匠石ハ匠ノ伯ニ同テ曰吾斧ヲ取テ夫子匠

云ニ随テヨリ以來如此大ナル材木見タル莫ナシ然

ルニ先生敢テ見スシテ行過タマフハ何故ソヤト匠

石答テカノ木ハ散木也舟ニ作ラハ沈マシ棺槨ニ作

ラハ速ニ腐レシ器ニ作ラハ速ニ毀レシ門戸ニ作ラ

ハ液出テ子ハラシ柱ニ作ラハ蠹ハシ是不材ノ木也

用ヘキ所ナシト云ヘリ此莫ヲ以テ用ニ立サル人ナ

散人ト云位ハカノ有テ官ナリ目ドル役儀ナキヲ散

位ト云散官散事ト云也散ハ取リ用スシテ散ス

意十リ

一平文 統日本紀 嘉祥二年十月辛巳朔癸卯 嵯峨天皇大

后遣使奉賀 天皇 四十也印本 宝算也 其鞆物黑漆平

文尉子十基 盛彩帛机 此者誤 前就中一前御插頭 造沓山

鑑令御插 一前居和琴二面 云々 〇年中行事 秘抄 雜覽所

幣科串八筋 黑漆平文也 〇愚時記 安元三年諒闇三月

廿二日 宗盛卿夏裝束也 不更衣也 從公 皇 之時 雖着諒

闇服 參本 死之時 如此 隨身諒闇也 柳乘息侍 從清宗車

如何 是平文車也 故殿保元 慶令用盛經 給也 是八兼車

也 直腹人乘平文專不可然歟 〇台記 文安六年正月四

日 御元腹平文大床子二脚 〇江家次第ノ抄 四方平文

ノ高机 謂平文者 以白鴈彫唐卷 貞文云 鴈當作鴈 〇飾抄 鞍移

衛次將乘用平文 移入或八摺貝入玉或 回首各ニ平文

移ニ鞍覆無所見 同鞭乘和鞍之時 用蒔繪鞭用平文ノ

鞍之時 猶用蒔繪鞭無難歟 〇貞文 按較具 ハスヘテカナ

金銀ニテモ 白鐵ニテモ 文ヲ高彫上ケズ 窪メテ彫タ

ルハ平文也 蒔繪ニ平文ト云ハ文ヲ高ク置上ニセス

平ニ画タル也 螺鈿モ貝ヲ高クセス 漆地 同 ヤウニ平

ニ摺タルハ平文也 玉ヲ入モ同シ 平トハ高ニ對シテ

云十リ

一御插頭ノ臺右ニ所引之 統日本後記ノ文ニ見タリ

一トカクト云 詞トカクトモカクモトカウトモ

アレカクモアレナド、云ハ〇トハ何也カクハ此也

俗ニ兔角ノ字ヲ用ルハ 詞ニ付ケタルアテ字ニテ正

義ニ非ス何ヲト、云ハ何レノ處ヲドコト云何レ
ノ方ヲドオタト云類ニテトハ何ノ字ノ一ツノ訓
ナリ何レヲト、云ハイツレノイヲ略シロレヲ畧シ
テ中ノツヲ用サツトトハ音相通ナル故ツヲト、
轉シテ云也リスヘテ吾用言ニハ中畧上畧下畧ノ語ア
リコレヲシラサレハ
通シカタキナリハ
一歌拈漢土ノ畧ニ歌拈ト云一アリ是ハ又ヲ記臆タ
メニ真変ヲ歌ニ作りテホヘ易キヤウニシタル者
也歌ノ詞ニテ真変ヲ拈タル也医畧ニ脉法某方經絡
ナドノ歌拈多シ占筮身外雜事ニモ歌拈アリ又吾国
ニモ此変アリ鷹百首ハ定家卿又西園寺公經公又最
明寺時頼又近來龍山公等ノ作アリ同三百首ハ定家

卿ノ作也高館百首ハ源義經ノ作也ト云真偽ハ不知
軍歌也馬方百首ハ大坪慶秀ノ作也大追物百首ハ佐
々木尼子長綱ノ作也茶礼百首ハ利休ノ作也射儀百
首ハ細川玄首ノ作也ト云説アレ氏疑ハシ日置何某
又吉田何某カ作トモ云此外諸道ノ畧ニ歌拈アリ口
柏子ニテヲホヘサセンカ為也
一土器大小之名 御厨子死ノ預リ高橋若狭守紀宗直
説トモリハ随分小ニテナヨツト物ヲ盛ル故ノ名也
○モリハ随分小ニテナヨツト物ヲ盛ル故ノ名也
今大車ヲ用テモリハ不用○三度ト云ハ大車ベトノ
孟ノホナリニ三盃也五度ハ五盃也○小車ハモリニ少
シヲホキシ○アイハ小車ノ少シ大ナルモノ○ヘイ

カウハ又其上也。ソクビハ大血おドアルモノ也。又
去。凡ハタクヒクニテ寸法キハマラサル土器ナリ
。様ハ寸法キハマリタルモノヲ云三寸ナレハ三寸
四寸ナレハ四寸ト定マル也。今ゴフニテキラ引タ
ルノミ云ハ誤也。御ハ御上リノ器ヲ云。貞丈云右
土器ノ解舊記ニ合サルナリ其説ヲホツカシシ。
又云タルジリハ辛ニテクシリ窪メタル鹿相ナル土
器也。是本式故神供ヲ盛ル也。ハクヨシト云。口ク口引
ニシタルハ式正ニ非ス。又タクシリニヒ子リトメト
云。所アリ其方ヲ前ニシテ酒呑ムヲ門出ニハ忌ム也。
是昔ノ麦也。今是ヲ和ス。

一 辛螺色ノ狩衣 辛螺色諸家ノ装束抄ニ此名目見ス

園大曆ノ師ノ卿ノ公記ヲ引テ康永四年八月廿日辛
巳御幸天龍寺此寺昨日在供養ノ器御隨身奈ノ久文
注云狩衣不知其色面黄裏紅綾削リ辛螺色ノ狩衣ト
云。隨身之色之由自攝之由聞之然而其昧不庄心。
貞丈云辛螺ハニシト云貝也。赤ニシノ貝殼ノ内ノ色
赤黄色也。故表黄裏紅辛螺色ト云也。昂桂子色萱草ノ
色ノ類也。

一 神代紀林抄日本紀神代卷注釈ノ諸昏ニ本文ニ奇怪
ノ下アルヲ釈スルニ妙昧妙用ト云是奇妙不思交ヲ
云也。仏家ニ神道自在ト云ニ異ナラス。麦物奇妙不思
交ニアルヘシ。只人麦作業ハ奇妙不思交ハナキナレ也。
和漢考ニ大古ノ下ハ其時ノ記録ナシ。古老ノ談ヲ傳

テ遙ノ後代ニ及テ記タレハ奇怪モアリ

一色バシタトヘハ黄バシト云赤バシト云類ハシハ

食ヨムトノ意ニテ其色ヲ兼子含ムヲ云含ム物ヲウ

チニフクムニテ食ムノ義ニ通ズル也漢語ニテハ帶

ノ字ヲ用ル也帶黃ト云ハキハミ也其外推テ知ヘシ

又ケシキハ氣色ヲフクムヲ云也

一幣帛字義古語拾遺ニ植穀而造白和幣植麻而造青和

幣ト見ヘタリ穀ハカキノ木也此木ノアマ皮色白シ

其アマ皮ヲ裂テ串ノ頭ニ挿ミタルヲ白ニキテト云

麻ノ幹ノウハ皮ハ青シ其ウハ皮ヲ裂テ串ノ頭ニ挿

ミタルヲ青ニキテト云此二品今世ノ目ニテ見レハ

何ノ用ニモ立ヌ物ナレバ大古ノ人ノ風俗ニハ人ニ

對シテ禮義ヲ行フニハ右ノ二品ヲ贈リテ礼交ヲ行

フノ驗ヲアラハス為ニ用タル物也此二品ヲ禮義ニ

贈ル莫ク漢土ノ風俗ニ引クラヘテ見レハ漢土ニテ

礼物ヲ幣物ト號シテ指帛十トヲ贈ルニ似タル十

ル故ニキテヲ漢土ニ寫スニハ幣帛ノ二字ヲモ借り

用ル也ニキテト云詞ハ上古ヨリ有来リテ漢字ハ後

ニ似タルヲ借リテ付タルナリ神ヲ祭ニハ大古ノ

風俗ヲ以テ祭ルヲナル故今モ神ニニキテヲ奉ル也

〇ニキテト云〇ミテクラト云〇又サト云〇三名一

物也ニキテト云ハニギハシデニテ此物ヲ持テテ手

ヲニキヤカニスル意也ミテクラト云フハニハイミ

ノ略語ニテイミシキトホメタル詞也嚴ノ字也テハ

手也。○夕ラハ○メクラス也。此物ヲ持テ拜礼スルニ
古ノ礼法ニ左右左ト三度トアリメクラスニハノ名
也。又サト去ハ○ノサノ轉語也。又トノト音相通也。○
ノサハ○ノリクサノ略語也。○イリトハ法式ヲ去○
クサハ異也。俗ニ曰○是ト礼義ノ法式ニ用ル異ト去意
ナリ
一次券 脛中ニカクハバキトヨム源平盛衰記卷十九
佐白木取馬公世ニ十キ身ナシハ馬七十キ○次券脛
中ニ編笠ヲ着腰ノ刀ニ太刀ツキテ京ヲハ未明ニ出
シ共去メ太子記ニニ行列ノ下部ノ一ヲ去ニ次券脛
中見ヘタリ下賤ノ者ハ脛中トハ思ハルレ其製詳
ナラス次券ハ例ノ借字カ如何

一皮草韋 小補韻念皮字ノ注曰徐曰皮理之曰草柔之
曰韋字彙草字ノ注曰皮熟曰韋生曰草説文皮去其毛草
更之小補韻念草字注曰徐曰皮去其毛潔而瑩之曰草
礼記禮草充盈注曰韋是草外之薄キ皮草是膚收厚キ皮
也字彙韋字注曰柔皮熟曰韋生曰皮去毛曰草○貞文
去皮ハカハノ惣名也柔ク去ヘハ皮草韋ノ三品アリ
皮ハ毛ヲ去ラザルヲ去毛皮也草ハ毛ヲ去テ皮ノ膚
ノ滑ナルヲ去サレハ是ヲ十メシカハト去韋ハ十メ
シ草ノ滑ナル膚ヲ削リ去リタルヲ去是ヲオシカワ
ト去柔ニシタルカハ也俗ニトクニ俗ニハ皮草ノ二字
ノミ用テ韋字ヲ用ヒザルハ誤也古昏裝束抄十トニ
モ太刀ノ筋ヲ記シタルニ韋ノ字ヲ用ヘキ所ニ皆草

ノ字ヲ用ヒタルハ誤也又釵ノ裝束草藍十メシ青十
メシ赤十メシ猿十メシ十ド、アルモ非也太刀ノ裝
束ニ用ユルハ葦カハシ也草カハメシニアラス名ノト寸
ヘ違ヘハ其製作違フユヘ是ヲ記ス也甲冑ノ製ヲ記
スニモ皮草葦ノ三字ヲ分別スヘシ○膜音マツク是ハ
皮ノ内ニアリテ肉ヲ包ムウスカハ也アマカハト去
也クナヒルノカハ口中眼中ノカハトモ膜ナリ膜
膺ヲ別々ニ隔テ包ムウスカハモ膜也
一 縑カトリキス 和名抄云毛詩注云所交功又音消縑也和名加止利縑也一名年中行縑也
縑兼音其絲細緻數兼於絹也○助無智秘抄一名年中行縑也
云白重夏ワカキ人ハ縑ノ絹ヲソ用ル其絹大和國ノ
貢也近代ハ絶ヘテ見ヘス然レハ唯厚キ唐絹ヲ用ユ

ルナリ

一 騎射八術秘傳各十七卷或騎射八道ト題シタル本モ
アリ十七卷ノ内○大追物五卷是ハ古昏也但五卷ノ
ミニテハ全カラス○笠懸五卷此内第三ノ卷ハ偽作
也其外ハ古シ○牛追物一卷○狩倉一卷○八的一卷
○狹物一卷○圓物一卷○賦乙ゴリ一卷○草鹿一卷
○流滴馬一卷右八卷皆偽作也且狩倉ト云物古代無
之新作也又賦乙ノ字古代不用也京都將軍ノ時用ラ
レシ小笠原家ノ古昏ニハ笠掛流滴馬大追物ヲ馬工
ノ三ツ物ト云騎射ハ此三ツ物也外ニ牛追物又騎射
也又的大の草鹿圓物ヲ歩立ノ三ツ物ト云此三ツ物
ハ步射也此外ニ狹物小的ブリク皆步射也八ツ的古

騎射ナレ其式絶タリ後代步射ニハツ的アリ偽作
ナリ三ツ物ト云ハ流箱馬ノ別名也又步射ノ三ツ物
モアリ右ニ云如ク古ハ騎射ト云ハ馬上ノ三ツ物ト
牛追物ト合テ四岳也其外ハ步射ナリサレバ古代騎
射ハ術ト云フモ八道ト云フモ曾テ無之近年存藤音
人定易ト云者カ出シタル也此汝藤ハ大坪流ト称
シテ騎術ノ師也彼流ノ騎方ノ昏雲霞集ハ大坪道禪
カ雲霞集ト云古昏トハ大ニ違タリ定易カ武馬必用
奴馬大元記等ヲ著テ板行セリ偽作妄作取ルニ是ラ
ス故実ニ審キ人ハ信用セリ痛シキナリ武馬必
用アラハ武射必用モアルヘシトテ寒川儀太夫ト云
者武射必用ヲ著シテ板行セリ是モ妄作文ル夫弓馬

ハ武藝也然ルニ武馬武射ト号スルハ何莫ソヤ此題
号ヲ以テ其昏ヲ推量スヘシ弓馬ハ武ニ用ヒスシテ
何ニ用ルト思フヤ近世弓馬ノ師近家故実ニ暗ク偽
作妄説ヲ造リ秘傳ト号スル者多シ
一 踵字訓クヒストヨム俗ニキビスト云又カト又ア
リナ又アクト如此俗称多シ田舎ニテ所ノ方言ニテ
平三郎ト云

一 弓強弱之称今世ハ六分ノ弓七分ノ弓一寸ノ弓ナド
ハ云古人ハ幾分ノ弓ト云称ナシ古昏ニハ二人張三
人張五人張ナト、云多質高忠ノ聞昏ニ三人張ト云
ハ二人弓ヲ押テ一人弦ヲカクルヲ云一張ノ弓ニ人
多クハ取付レヌ物ナレハ五人張ナト、云ナハナシ

トイヘリ貞丈按此高忠ノ記也然リ五人張ノ名古キ
軍談昏ニ見エタレヒツレハ文華ノ饒詞ナルヘシ弓
太ク厚ケレハ弓シナヒ難シ大カノ人引ク莫ハ引ク
ヘケレトモシナハサル物ヲ無理ニ引ハ必引折ルヘ
シ矢ワザノ勢キヒシキハ弓ノ強キニ依ラス射藝精
熟シタル手法ニ依ル也我カニ勝タル強キ弓ニテ射
レハ弓ニ而腕ヲ引縮メラレ足腰弱クナリ腹ヲ上ヘ
引上ラレテ惣身ノシマリヲ弓ニ棄レテ放スユヘ矢
勢ハ必弱キモノ也サレハ古代ノ強カノ人ナリトテ
サノミ強弓ハ引マシキ也義家朝臣ノ弓ハ強カラサ
リシカトモ鎧三領重テアルヲ射貫シテ陸奥記ニ見
タリ可味也射藝知ラサル人ハ弓ヲタニ強ケレバ矢勢

キビシト思フハ意味違ナリ

一山樞山菅古代ノ記禄ニ賀物ニハ必山夕子バナ山ス
ケヲ用ユル莫見ヘタリ山夕子ハロヤフカウナ
也山スケハ大葉ノ麥門冬也シヤウガヒゲクソトモヒ
小葉ナルモアリ大葉ナルモアリ大葉ナルヲ山スケ
ト云山夕子ハ十モ山スケモ冬霜雪ニ逢テモ枯レヌ
物工へ賀物ニ用ユル也松竹用ルニ同シ和名抄ニ麥
門冬和名夜未須女トアリ
一カセギニ品アリカシケタル樹ヲカセキト云カシ
ケハ樵悴ト昏キ又廉ヲカセギト云此ニ品共ニ古歌
ニヨメリ和名抄樞首杖漢語抄云魁カ世部惠一云廉
杖云ハセツエハカセキツ上ノ畧也
一聖賢ノ本地垂迹清淨法行經曰我遣三聖化彼震旦下

學集礼義先閑然後可進八字アリ月光菩薩彼称顔回
光淨菩薩彼称仲尼迦葉菩薩彼称老子此經文一條兼
良公榻嶋曉暁輩ニ引ケリ○下學集ニモ引ケリ古文後
集ノ首昏ニモ引ケリ我國諸神ニ本地垂迹ト云ノミ
ニ非ス漢土聖賢ニモ本地垂迹アリ彼經ハ偽經ト云
ヘシ彼經モ亦弘法傳教智證慈覺等ノ所作ナラニ歟
漢土ノ僧ノ作ニハアルヘカラス又馬ハ馬頭觀音ノ
化身也ト云牛ハ迦葉佛ノ化身榮花物語ト云畜生マ
テニ本地垂迹ヲ云ヘリ日本ノ諸神モ漢土ノ聖賢モ
牛馬モ何モ彼モ皆仏ノ化身也ト云テ仏ヨリ責キ物
ハナシトコシテヘテ偽テ云ヘル也仏法ニ妄語戒ヲ
説キ十カテ仏説ハ皆妄語也其妄語ヲ号シテ方便説

ト云也妄語ノ罪ニ依テ地獄ニテ古ヲ抜クナラハ釈
迦ハ第一番ニ古ヲ抜ルヘシ僧徒ノ偽ヲ以テ朝家ヲ
欺キ奉リ庶民ヲ惑ハシ財宝ヲ貪ルハ妄語ノ異名ヲ
方便ト号スルヲ幸トシテ奸計ヲ行フ者也

一五文字 女子称五文字女の純り化の女子をうやまひ
み又字々稱するもの后宮名目抄々真清美譜胎のみ文字
を備へる事をとく(たり)貞女を女子の例々後去の右儀
ありを同じしてし事ありあり(きり) 按本朝文辞苑

一菅公ノ詩ニ回卷称辨御自注俗謂貴女為御蓋取女
御之儀也ト云(り)是(り)按(り)み(り)文字のみ(り)借(り)字(り)を
実(り)御(り)文字(り)也(り)御(り)ハ(り)女(り)ノ(り)貴(り)称(り)也(り)又(り)后(り)宮(り)名(り)目(り)抄(り)々(り)信(り)西
法(り)師(り)の(り)娘(り)無(り)の(り)為(り)れ(り)と(り)西(り)門(り)院(り)の(り)余(り)姉(り)方(り)一(り)送(り)水(り)ノ(り)哥(り)り

人より心何れの文字のあききくおもふ事せしむるも是り
 めるも心を修むるに非ざるも其の如し人より其の廣く男女
 をきいて其の如く修むるも其の如し又文字より其の仁義礼
 智信を以て其の如く修むるも其の如し其の如く修むるも其の如し
 其の如く修むるも其の如し其の如く修むるも其の如し其の如く修むるも其の如し
 其の如く修むるも其の如し其の如く修むるも其の如し其の如く修むるも其の如し

一 角筆 皇太子親王等御讀唇始ニ用給フ字突ノ下也
 角筆ノ名江家次第ニ見タリ其制ハ知レズ滋野井大
 納言公麿卿ノ門房橘嘉樹カ所持セル角筆ノ形左ノ
 圖ノ如シ先年吾同僚蜂屋定章カ予ニ見セシモ又同
 シ制ニテアリシ

角筆

鸚鵡ク子ハシヨリ尾迄六分



以下五寸九分

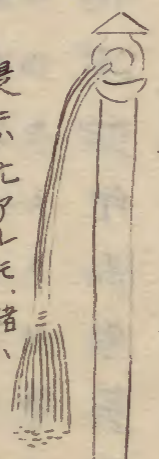
コレホトノ間八角以下九分

此奴總八何ノ為ニ付ルヤ近世ノ物此類多シ

是ハ菅家ニアリ清家ニ傳ルハ竹ナリ杉
 違タリ角筆ト云名ニ作ハ此何

同

是ハ持読
 尚後用之



惣長サ六寸一分

一説是ニハ穴ハアレバ緒フヤ付ズト云

是ニハ穴アレバ緒ハ
 付ズト云細ナル一古風氏思ハレズ

貞丈云古代ノ角筆ノ制右ノ如クナリシヤ若シ後代

再與ノ新制ニテハ非スヤ後代公家ニテ新制セラレ
シ物ヲ見ルニ何ニモ彼ニモ糸総ヲ付ル莫アソ角筆
ニ緒モ総ヲ付タルハ何為ソヤ予疑アリ古代ノ角筆
ハ唯象牙十トニテ直ニ削リ其端筆ノ如ク尖リタル
ノミニテアラサリシヤ古物ヲ見マホシキモノナリ
今世公家ニ用ルモノトタニ云ヘハ諸人信之
予ハ信スヘキモノハ信之疑シキ物ハ信セス
一 款識 トクハシ 印ノ文字又ハ鐘鼎等ノ銘ノ文字ノ彫
ヤウニ款文識文ノ二様アリ款文トハ文字ヲ陰坎シ
タル也陰坎トハ文字ヲ依リホリクホノタル也是ヲ
陰文トモ云也識文トハ文字ヲ陽起シタルヲ云ナリ
陽起トハ文字ヲ高クホリアケタル也是ヲ陽文トモ
云也 〇草帶ニ著クル玉石ニ有文玉無文玉ノ二様ア

リ有文玉ハ画文アルヲ云其画文ヲ小サククホメタ
ル玉ヲ付タルヲ陰文ノ帶ト云 裝束抄ニ陰文ヲ隱文
ト昏タルアリ隱ノ字ヲ用タルハ誤也陰ノ字ヲ用ユ
ヘシ
小袍^{ハシ} 常ノ袍ニ非ス袖一幅ニテ端袖ナキ故小袍ト
云 天皇御元服ノ時能冠ノ人着之 理髮ノ人ハ御髻ヲ
ハカリハシク奉仕スルナリ 宗雅卿記仁治二年正月五
日今上階下御加冕日也己刺渡御北廂 御裝束
如恒 次召
内藏頭頭氏朝臣着當色 注云薄紫袍面裏同色無髻袖
帶同色也從普通袍短先是内藏頭進之行夏ニ藏人取
之懸零馬障子臨期內藏頭取之於下侍着之也主殿司
役之束帶ノ上ニ着之大結帶 石ノ帶ノ上カクノ中ニ

其フソヲ押入下畧○台記曰久母六年正月能冠右中
辨光賴朝臣着紫小袍參入南殿ノ後理髮大臣脱御幘
開唐匣蓋入之掩退歸ル○負丈之御元服ノ時ニ限
ス常ニ七響ニ參ル人ヲ御衽ノ人ト云ハ小袍ヲ裝束
ノ上ニ打カケキル故也

一日高見ノ國古ヨリ記區々ニシテ決セズ故ニ今愚按
ヲ記ス也天書第六曰景行廿七年春二月辛丑ノ朔士
子巡行秦將軍武内宿禰徇海陸來奏曰日高見者所
謂天府也其地者沃環其賦上上今與倭接壤獨擅山東
之利割身割面被裘髻髮自稱蝦夷此文引日本紀此文ヲ
以テ蝦夷ノ國ノ一名ヲ日高見ノ國ト云下ヲ知ヘシ
公望私記云日本紀ノ案ニ常陸國風土記云信太郡之

古老ノ曰御宇ニ難波長柄豊前宮之天皇ノ御世癸
丑ノ年小山上物部河内大山上物部會津等掾領高白
太夫等分筑波茨城郡七百戸置信太郡此地本日高見
ノ國云此文引日本紀此地ハ日高見ノ國トハ上古
蝦夷來テ吾國境ヲ侵シ奪シ莫アリカノ信太郡ノ地
ハ本蝦夷力侵シ得テ押領シタリシ處ナルヘシ故ニ
本ハ日高見ノ國也ト云ヘル也又中臣拔ノ詞ニ四方
之國中登大倭日高見ノ國ヲ安國止定奉氏云此文引日本紀按ニ
國中登ノ登ノ字助詔トスルハ謬也登ハ外也四方ノ
國中外也中ハ大倭ナリ外ハ日高見ノ國也サレハ下
文ニ大倭日高見ノ國ト委ク云ヒ顯シタル也倭ノ字
下日ノ字ノ中間ニ及ノ字アルヘキナレ凡無キハ上

古ノ詞簡約也上古ハ蝦夷吾カ国境ヲ侵シ掠ル一有
シニ依テ四方ノ国々ノ中ハ大倭外ハ蝦夷ノ国ニ至
ルマテ安国ト平ケ定タルト云テテ拔詞ニ作レル也
上古ヨリ我境ヲ侵ス者蝦夷ヨリ外ニハナシ又日本
紀ノ景行天皇紀ノ日本武尊ノ東夷ヲ征伐シタマヒ
シ夏ヲ記シテ蝦夷既ニ平テ自日高見ノ国還之トアル
モ蝦夷ノ国ヨリ還リタマヒシ夏ヲ云ヘル也以上新考
リ新日本紀ニ公望竊案ニ四方望高遠之地可謂日高
見国歟指似不可言三處之称謂身トアリ此説甚拙キ
案也此外ニモ此類ノ空説多シ用ルテ勿レ蝦夷我
ヨリ東方ニ當ル国ニテ早朝ニ日出テ地上ニ殊リ
高ク見ユル方ニアル国ナル故蝦夷ヲ指テ日高見ノ

国ト云ナリ

一 浅深秘抄撰者 後深心院関白道嗣公之記應安六年

二月ノ條ニ云一日癸酉時風頗吹自師ノ大納言許借

給抄物ニ卷是伏見殿御本云々其名浅深秘抄云々是

菩提院禪閣之説云々令書寫可返遣也○嘉樹云衣笠

内大臣家良公ノ菩提院ノ説ヲ記也

菩提院禪閣基房公御説ニテ衣笠内府家長公御業
作衣笠内府雜抄トアリ右滋野井家御説松陰拾葉
御抄出タリ河海抄ニハ嘉樹説アリ

一 中臣拔詞 元ハ禁中ニテ六月ト十二月ノ晦日ノ大

拔ノ時ニ中臣氏ノ唱ル詞也延喜式ノ祝詞ノ部ニ載

テアリ其詞ヲ處ニ改テ増減シテ常ノ拔ニモ唱ル也

其文ノ注解多シ衆説異同得失アリ近世理学ノ神道

トテ儒道ヲ習合シタル神道ノ説專ラ教誡ノ説キ成
スハ古義ニ非ス桂秋斎多田カ氣吹抄ハ古義ノ如ク
見ユレ凡引昏疑ハシ彼ハ妄作偽説ヲ好ル者ニ信
シ難シ又云抜詞ノ作者不詳諸説皆推量シテ明徴ナ
シ知レヌマ、ニシテ置ヘシ
一次侍従非侍従中務省被接宦被接トハ中務ノ下目ニ
テ十ノ中務ニ付テマナ
ハソツトムル他官侍従定數八人アリ是常ニ定メ置
ル、正侍従也此外ニ公夏ヲ行ハル、日ニ臨時ニ次
侍従非侍従ト云夏アリ此侍従ハ臨時ニ其日ノ公夏
ニ侍リ従フト云夏也此臨時ノ侍従ノ人々ノ中ニ以
前ニ正侍従ヲ經歷シタリシ人々ヲ次侍従ト云イマ
タ正侍従ヲ經歷セサル人々ヲハ非侍従ト云也去ハ

次侍従ノ中ニハ関白モ大政大臣モ左大臣モ大中納
言參議モアリ是皆以前正侍従ヲ經歷シ来レル人々
也非侍従ハイマタ正侍従ヲ經歷セサル人ノ其日ノ
公夏ニ侍リ従フト云也次侍従モ非侍従モ其日見參
ノ人々ヲ差別テ喚ヒ分ル詞也見參トハ其日ニ現在
ニ參上シケル人々ヲ云也其見參ノ人々ノ官位姓名
ヲ外記ノ一紙ニ記スニ次侍従ト非侍従ヲ分ケテ昏
也具昏物ノ名ヲ見參ト云此見參ノ昏物ヲ外記カ文
杖昏物ヲハサニサシ映テ上卿奉行也ニ捧ルナリ常
ムツエナリ
ニ八人ニ定レル正侍従ハ天子ノ御傍近ク侍リ従フ
ノ義也次侍従非侍従ハ臨時ニ公夏ニ侍リ従フ義也
又上古ニハ正侍従八人次侍従九十二人補ス侍従都

